

滋賀短期大学研究紀要  
第43号 2018年

## 滋賀県ピアノコンクールの参加者数の推移について

松井典子\*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Regarding the Transition in the Number of Competitors in the Shiga Piano Competition

Noriko MATSUI

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：滋賀県ピアノコンクールは、滋賀県が主催するコンクールで平成 28 年に開催 35 回を迎えた。当コンクールは、県民に日頃のピアノの練習成果を披露する場を提供することと音楽に対する意識の高揚を図ることを目的としている。

本稿では、過去 7 回における滋賀県ピアノコンクールの参加者数の推移を調査し、滋賀県ピアノコンクールにおいて参加者数の変動がみられるかを分析し、考察する。

キーワード：滋賀県ピアノコンクール，滋賀県，ピアノコンクール，ピアノ人口

### 1. はじめに

近年、お稽古事の多様化，子どもの人口減少，社会情勢や住宅環境の変化に伴いピアノ学習者が減少傾向にある。現在，教職養成校においてもピアノ経験者の割合が以前より減少し，既述の影響を受けていると考える。

日本の高度経済成長期の頃は，ピアノは代表的な子どものお稽古ごとの一つであった。現在と同様に，趣味として習う者，継続してピアノレッスンを受け，将来音楽大学の進学を目指す者と目的は様々であった。しかし，高度経済成長期と比べ現在は，音楽大学で専門教育を受けたいと思う者が減少している<sup>1)</sup>。また当時は，ピアノを習うために楽器（アップライトピアノ等）を購入する家庭も多く存在した。この頃のピアノの生産台数は，毎年増加を続け 1979 年頃にピークをむかえるが，1982 年ごろから年々減少している<sup>2)</sup>。ピアノの生産台数に関しては，近年の住宅環境の変化にしたがって電子ピアノが普及したと電子ピアノの品質向上などが考えられるだろう。このように社会情勢や住宅環境等の変化に伴い，ピアノ学習者人口も様々な変化を経て今日に至ると考えられる。

さて，（公財）滋賀県文化振興事業団では，地元のピアノ愛好家のためにピアノコンクールを開催している。コンクールの参加者は，概ねピアノを幼少期から継続的に習い，意欲的にピアノの演奏技

---

\* E-mail: [noriko-matsui@sumire.ac.jp](mailto:noriko-matsui@sumire.ac.jp)

術や音楽表現の研鑽を積む熱心なピアノ学習者である。

本稿では、お稽古事としてのピアノ離れが進んでいるといわれる中、滋賀県ピアノコンクールの参加者数においても参加者数の変化や何らかの影響を受けているかを調査し分析する。

なお滋賀県ピアノコンクールの参加者数のデータは、コンクールの主催である（公財）滋賀県文化振興事業団滋賀文化・元気室からの提供によるものである。

## 2. 滋賀県ピアノコンクールの概要

滋賀県ピアノコンクールは、昭和57年度から始まり現在に至る。平成28年に第35回開催を迎えた。滋賀県ピアノコンクールを開催する目的は次の通りである。

滋賀県ピアノコンクールは、ピアノ演奏に励む県民に練習の成果を発表する機会を提供すること、音楽追及への意欲を高め、県民の音楽に対する意識の高揚を図るという目的で開催している<sup>3)</sup>。

### 【出場資格】

滋賀県内に学籍を有する児童、生徒、学生・一般

学生・一般については、本選時点で30歳未満（第26回から）

滋賀県に在住、または在勤の小学生から一般

### 【出場部門】

第26回からは、募集資格を学生・一般部門にも広げ幅広い年齢層の参加者を募っている。第32回までは、小学校低学年と高学年を分けて募集をしていたが、第33回からは小学校の部をさらに細分化し、小学校1.2年、3.4年、5.6年と小学生の部門を3分割している。この変更は、小学校低学年、高学年という大きな括りをなくすことにより、身体的な差が著しい低学年層を考慮し、1,2年生であっても予選を通過し、本選に出場する機会が増えるよう、より公平な審査を考慮し、見直した結果である。

### 【募集人数と開催会場】

予選、本線からなり、募集人数は各部門あわせて220名である。予選、本選ともに滋賀県内のホールで開催される。

### 【審査と審査員について】

予選、本選からなり予選、本選ともに公開で実施している。

予選は、課題曲と規定演奏時間がそれぞれの部門であらかじめ決められている。本選は、予選で演奏した以外の曲目で、予選と同じく規定演奏時間が設定されている。

審査員は京都市立芸術大学、愛知県立芸術大学、大阪音楽大学、相愛大学のピアノ専門の教授で構成されている。

### 3. 調査方法と調査の範囲

主催者である（公財）滋賀県文化振興事業団滋賀県文化・元気室よりコンクール参加者数のデータを提供して頂いた。また、過去の参加者数の傾向について主催者側の見解を取材した。調査対象年度および回を表1に示し、以下の対象回の参加者数を分析する。

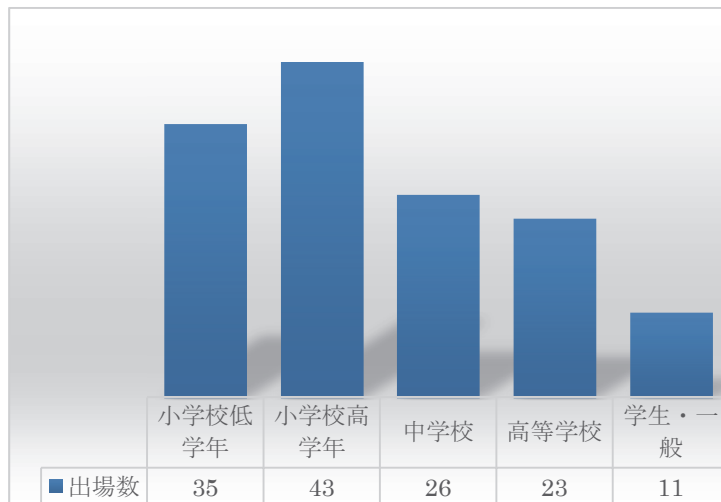
表1 調査対象回および年度

第26回	平成19年
第29回	平成22年
第30回	平成23年
第31回	平成24年
第32回	平成25年
第33回	平成26年
第34回	平成27年

### 4. 調査結果

各回の予選における部門別参加者数（図1—図6）と各回の参加者総数の推移（図8）を以下に示す。

図1 第26回参加者数



滋賀県ピアノコンクールの参加者数の推移について

図 2 第 29 回参加者数

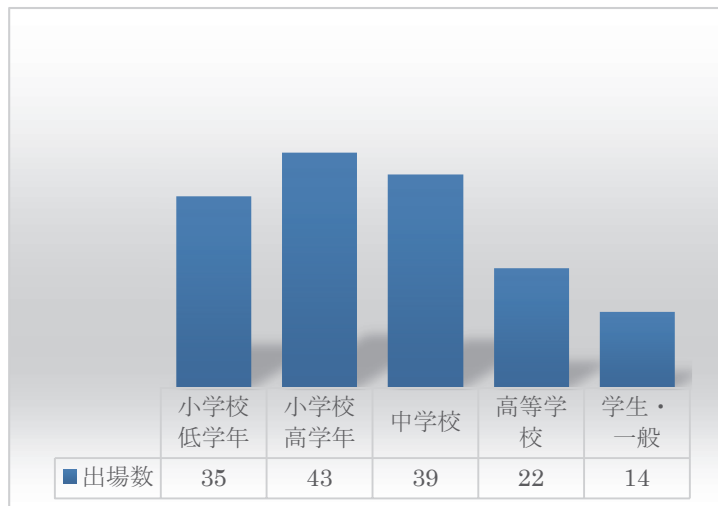


図 3 第 30 回参加者数

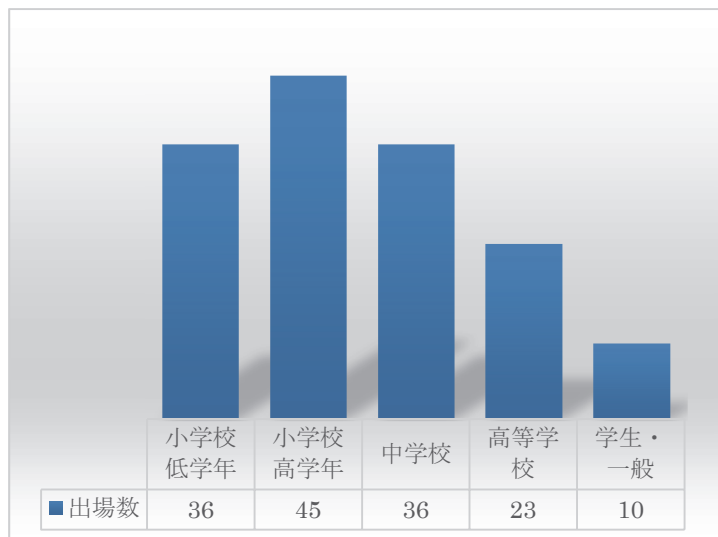


図 4 第 31 回参加者数

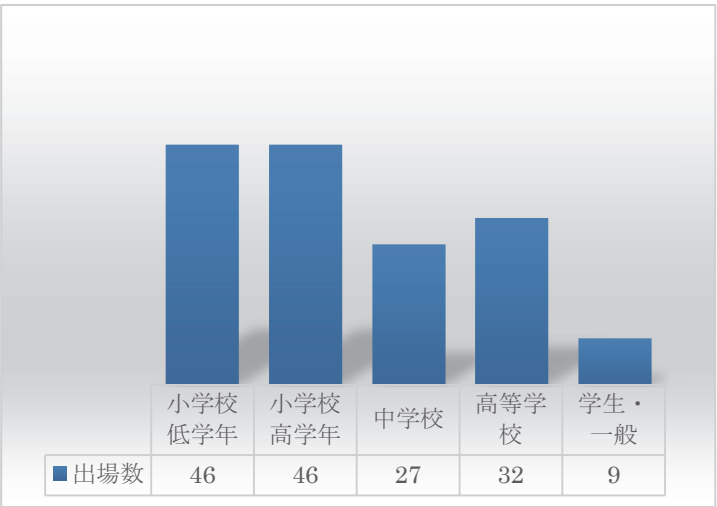
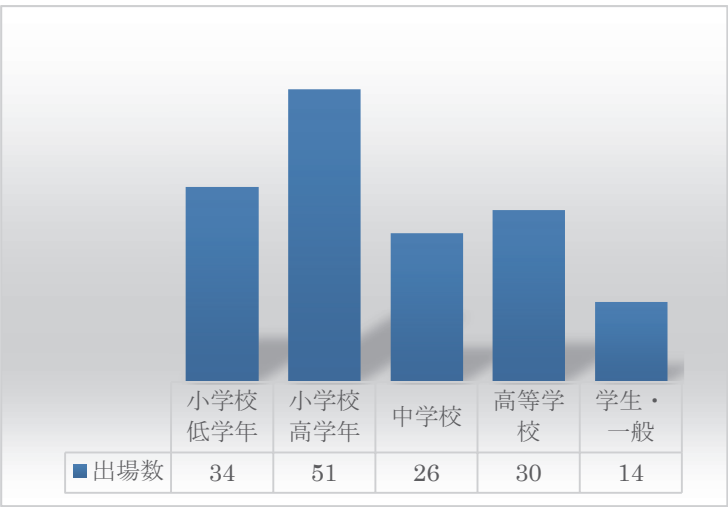


図 5 第 32 回参加者数



滋賀県ピアノコンクールの参加者数の推移について

図 6 第 33 回参加者数

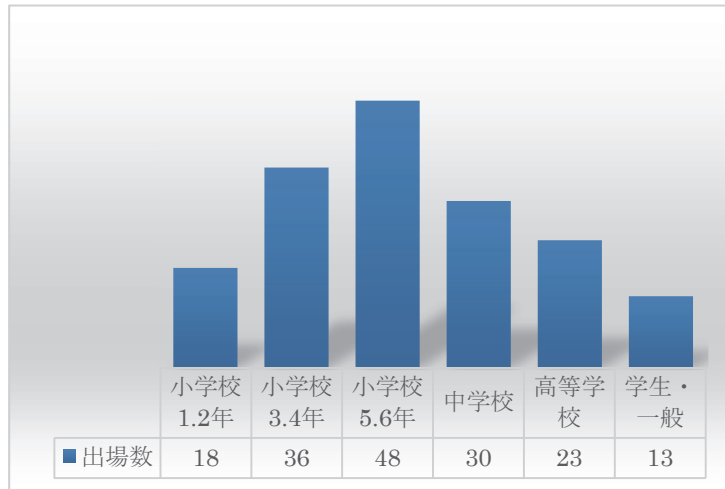


図 7 第 34 回参加者数

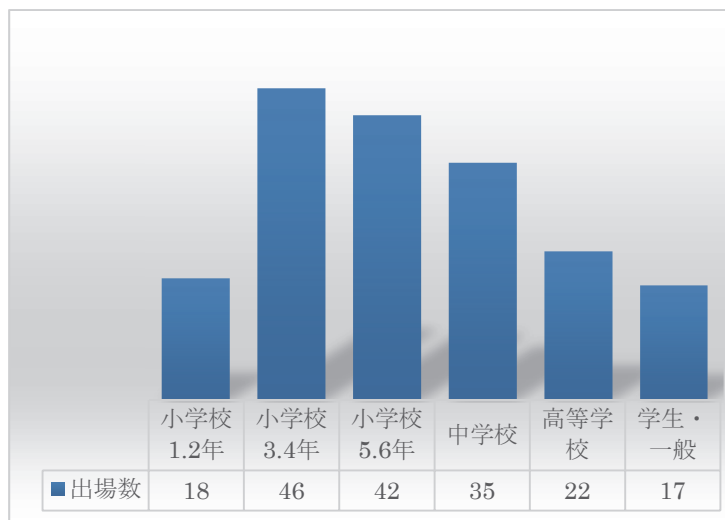
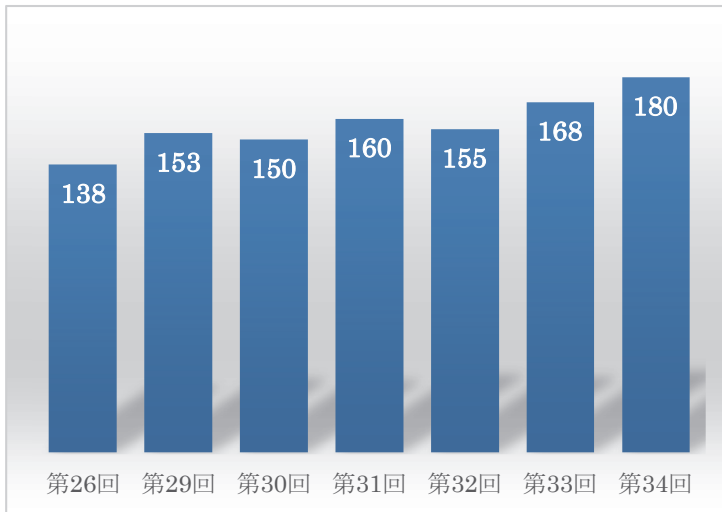


図 8 参加者総数の推移



## 5. 調査結果と考察

少子化問題やお稽古事の多様化によって、ピアノ学習者の人口も同様に減少するのは必然的なことと想定していた。しかしながら、滋賀県のピアノコンクールの参加者数を調査した結果、既述と異なる結果が明らかになった。

図 8 の過去 7 回におけるコンクールの参加者総数の推移のグラフが示す通り、滋賀県ピアノコンクールの参加者数は、減少どころか増加傾向にあることが判明した。筆者がコンクール主催者に参加者数の推移について取材した際、主催者は、人口減少の影響を当コンクールは受けていないと断言していた。注目すべきことは、小学生の部門では増加傾向にあるということだ。参加者数の増加の最大の要因は、出場部門の項でも述べたように、小学校部門の募集形態の変更である。第 32 回までは、小学生の部門が小学校低学年と小学校高学年の 2 部門の募集であったのに対し、第 33 回からは、小学校 1・2 年部門、小学校 3・4 年部門、小学校 5・6 年部門と 3 部門に細分化し募集した結果である。第 33 回からは、小学生の参加者数の増加が顕著に表れている。

他の要因として、毎年コンクールに挑戦している常連の参加者やコンクールに生徒を送り出す個人の音楽教室の指導者や楽器店の存在が関係すると考える。主催者からの取材では、参加者の中には毎年、兄弟姉妹で参加し、リピート参加率が大変高いコンクールであることを指摘していた。さらに滋賀県のピアノコンクールをピアノ教室の取り組みの一つとして生徒を送り出す指導者の存在もある。滋賀県ピアノコンクールの特色として、本選のプログラムの最後に、招待演奏として過去の滋賀県ピアノコンクールでの上位入賞者で、現在音楽大学在籍者や演奏家として活躍するピアニストを迎え、演奏を披露する機会を与えている。このような取り組みは、コンクール参加者の今後の練習の励みに

なり効果的であると考ええる。

最後に滋賀県の人口の動向について述べる。滋賀県人口動向分析・将来人口推計【暫定版】の平成22年から平成25年の年齢階級別の人口移動の状況は、「滋賀県は転入超過が幅広い年代となっているが、乳幼児や30歳代を中心とした子育て世帯の転入が目立っている<sup>4)</sup>」と分析している。滋賀県において全体的な人口減は指摘されているが<sup>5)</sup>、本研究の年齢層の減少は他の都道府県に比べてあまりみられないということが分かる。小学校部門の参加者数が増加傾向にあることは、この点も影響しているのではないかと考える。

## 6. まとめ

本稿では、滋賀県ピアノコンクールにおける参加者数を調査し分析した。経済が衰退化すると文化も育ちにくいという概念がある中、滋賀県ピアノコンクールは、安定的な参加者数を保持し、人気を誇るコンクールであることが判明した。また、コンクールを運営する主催者は、時代の流れを考慮し、参加者のニーズを追求した募集内容の変更等、様々な工夫を行っている。その結果が参加者数に表れていると筆者は考える。

今後も滋賀県ピアノコンクールが地域の音楽・文化に根ざし、ピアノ習得者の日頃の練習成果を披露する貴重な場として継続して開催されることを願いたい。

## 謝辞

本研究において、データや資料を提供して頂いた公益財団法人滋賀県文化振興事業団・元氣室に深く感謝申し上げる。

なお、本研究は、平成28年度学長裁量経費による支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

## 文献

- 1) 久保田慶一(2017), 2018年問題とこれからの音楽教育激動の換期をどう乗り越えるか?  
河西恵里(株式会社ヤマハミュージックメディア), p194 株式会社ヤマハミュージックメディア, 東京
- 2) 同上, p54
- 3) 滋賀県ピアノコンクール ホームページ <http://www.biwako-arts.or.jp/rd/piano/17189.html>  
閲覧日 2017年8月13日
- 4) 滋賀県人口動向分析・将来人口推計【暫定版】2015/2/5, 滋賀県, 人口減少を見据えた豊かな滋賀づくり推進  
本部事務局 <http://www.pref.shiga.lg.jp/a/kikaku/ginkogensho/files>  
閲覧日 2017年9月5日
- 5) 同上